



六花

1

2022

リっかはいくかい

八海山 ◎ 山田六甲

善野行「聖五月」出版祝

秋の暮必ず壘の声を聴く
砂に足鍛へてゐたる大旦
縁側に差しくる初日膝がしら
封筒を初日にかざしゐる子かな
右左まよはず出しぬ初門出
初日差す庭石軽く見えにけり

縫初の髪をすべらす母の針
育つ弟子育たぬ弟子や初日記
拭き浄め先祖とすごす去年今年
年酒のフランスルロワインかな
年酒かな八海山をなみなみと
弓始那須与一のころざし
七転び七起きの年送りけり
猫の餌へ年賀にきたる朝の蜘蛛
三宝の新米白砂より白し
前浜の魚卵とたらば懐かしむ

善野行作新米

月高し ◎ 笹村 政子

月明や闇に浮かびし角櫓
群れ鳥の羽音よぎりぬ観月会
観月会了へてわが家の月高し
秋声を聴かむとすれば母の顔
半眼の猫に見らるる小春かな
秋風や進みては退くチンドン屋
刈られたる萩にも風の通ひけり
螻蛄鳴くや腓返りの来る気配
海峡へ躍り出でたる渡り鳥
亡き夫の眼鏡拭ふ日鳥渡る

▽チンドン屋の句。哀愁の惨む「チンドン屋」その言葉は古くなくても残したい日本の文化、庶民的だが永年人々の心を捉えて来た。子どもの心を挿んできた。大人にも庶民の文化であるとともにコマースシャルの先駆でもある。俳句も同じ命を持っている。

▽観月会了への句。観月が終わって家に帰り着くとすっかり名月は中天に上っていたよ、という作品。観月会の月も能もよかったが、能を省いた我が家の月の美しさも一等美しく、見事な月を愛でているのも佳いものであるというのである。観月会の名月は会場の人たちとの共有であるが、家に帰れば誰のものでもなく自分だけの月で亡き夫や娘と家族だけの名月になったのである。

▽同じく観月会の作品。能の最中に上空を鳥が飛んでよぎった。一瞬能から空の羽音に耳が奪われたが、それは過る一瞬で、すぐに能に視線を戻した。が、闇を飛ぶ鳥の羽音は音の残像として刻まれた。月明かりに飛ぶ鳥の印象が強く残っていたのである。

▽秋声をの句。秋声とは風の音や木の葉の散る音など、秋の気配を感じさせる音であるが、俳人は瞬時に秋声であると聴く。句のアンテナを常に張っているからである。その秋を感じさせる音には何か母のことが母の顔が浮かび上がる。秋にひと日母と結びつく。普段は忘れていたけれど強い思い出があったのである。

▽月明やの作品。名月と月明との違いを意識して詠んだのか。月の明るさに見た城の櫓は別世界の物のように浮かび上がって、月の櫓は幽玄な光景であることよ、という感動が改めて感じられる。

▽刈られた萩の句。刈られた萩に垂れる優雅さはないが確かに風に揺れているというのだ。政子の句は常に成長している。「にも」が取れたらもっといいのに。と思う。主宰はこのころ、何か「思う」ばかりだ。いけない、いけない。

夏萩 ◎ 志方 章子

一匹の蟬百匹分の声で鳴く
青柿の息をひそめてゐる様子
初盆の夫の帰れる我が家かな
説教も経も短し盆の僧
仏壇のマンゴー熟れてきたりけり
初盆や一人取り残されし我
納得のゆかぬ人生文月逝く
涙せむ島煌めける夜の秋
夏萩や夫との旅に見しことも
静かには寝させてくれぬ蟬の声

▽夏萩の句。生前夫との旅先で見た萩を強く思い出した。亡くなられてみると改めて旅先で見た夏萩の懐かしさが込み上げてくる。萩は女性の象徴で、女性の心境、胸中を表すのに和応しい花。こういう差別だと非難されるかもしれぬが萩は女性の象徴である。

▽青い柿は赤く実る秋（とき）をじつとエネルギーを溜めて待っているのだ。章子もやがて詩情が爆発して素晴らしい実りを待っている。

▽初盆の句。初盆はその家に亡くした精霊が「ただいま！と帰ってくる時である」。それは仏教の儀式のようであるが、その家に亡くした悲しみを少しでも安らげるように仏教では考えて作られたと思う。その都度遺族は悲しみを新たにするが、一方では悲しみを和らげる効果もある。盆灯籠に明かりを入れ、家の中を少しでも明かりで和らげるのである。そして八月十五日には帰ってゆく。その時にも送り火を焚くのである。

▽盂蘭盆は僧侶も沢山の檀家を廻って経を上げ、亡き人を弔う。さーっと来てサーッと風の如くに次の檀家へ行く。師走も忙しいが盆の僧も忙しいのである。それは物理的におつかしいから寺でその少ない読経を補うから心配しなくてもいい。

▽納得のゆかぬ人生の句。つまり悔いが残っているのだ。はたしてそうであろうか？短かかっても充実した日もあったに違いない。二人の幸せな刻は振り返るから短く思えるだけ。短くても充実した刻もあつたはず。気絶するほど熱く短く恋したひと刻を思い起こそう。その充実した刻をいつも思い起こすといい。人は過去の思い出に生きられる人どそでない人がある。どっちも宇宙時間から考えたら人も動物も泡のように一瞬の輝きにすぎない。貴方は幸せな人である。▽来年からはもつと前向きに生きて亡くなったひとを安心させてあげるのが、最大の供養である。文月とは陰暦七月の異称。もう秋になっているのだ。穂含み月から文月となったという説もある。諸説あり。

▽蟬の句。「三千世界の鳥を殺し主と朝寝がしてみたい（高杉晋作）」、「¹」という都々逸もある。

たふれ稲 ◎ 升田ヤス子

秋高し影を落して鷺来たり
踏んづけてしまひし精霊ばつたかな
街騒を突き抜けてくる昼の虫
野の花の活けある東司秋の風
たふれ稲風が歪んで来りけり
惣領の役目なりけり稲架組みり
小流れの鉄柵に稲掛けありぬ
秋風や火花はなやぐ農機具屋
図書館の踏み台きしむ秋湿り
遊印をどこへ押さうか十三夜

▽たふれ稲の句。この人どんどん若くなってくる。倒れた稲を過ぎてきた秋風が倒れた稲の所為で、歪んで来たというのだ。こういう句を機知と捉えて嫌う人もいるが、私は冒険の出来ない人ほどつまらないと思う。妙に大人びた句を詠む人がいたが、本人だけ、面白いのだった。

▽秋高しの句。鷺の様子を上手く捉えている。大きな影に驚いて仰ぐと鷺は、手の届きそうな高さで過ぎてゆく。

▽精霊ばつたの句、機知の句であるが、機知頓智を利かすのも、もともと俳句の持っている魅力である。こともあろうに精霊と名の付くご先祖さまの生まれ変わりのバツタを踏んづけてしまったよ、と三尺飛び退いて驚くのである。

▽秋風やの句。農機具屋さんが稲の借り入れ前で鎌などの鍛冶修理を持ち込まれて、火花を放らして大忙し。これこそ今が「刈り入れ時」なので大儲かり。

▽総領とは、長男のこと。「総領の甚六」という言葉があるが辞書によると「家名を継ぐべき子のことで、一番初めに生まれた子。特に、長男を指す。」「甚六」は「お人よし」や「愚か者」をいう語で、「甚六」のみでも、のんびりしてお人よしの長男をいう。甚六の語源は、「甚だしい るくでなし」を縮め、人名に見立てたものと考えられる。一説に、甚六は、順禄（じゅんろく）が転じた語で、元は「総領の順禄」だったともいわれる。順禄は、順番通りに家禄を受け継ぐと言う意味」とあった。当にその通りで六甲そのもの。

▽遊印の句。遊印（ゆういん）は、姓名や雅号、商号や屋号など特定の個人や法人に帰属しない文字を印文にした印章のことである。詞句印ともいう。文学や思想などを表現した語句が選ばれることが多く、篆刻家が好んで作印する。私も田代青山さんに彫ってもらった印を長く愛用している。

をみなへし ◎ 善野 行

腹の子の一寸ばかりちちる虫

機嫌よく秋明菊を持つ媼

せせらぎをゆかしうしたるをみなへし

蒲の穂の身をやつしたる汀かな

走り根に色新しき落葉かな

奈良坂に数々の秘話秋の雨

招かれてコスモスよりも美しき人

秋咲きの山吹やもの言はで雨

月を待つ気配の闇や御蓋山

秋風や出所づきあひも今日かぎり

▽ちちる虫の句。母親（ご子息夫人？）が妊娠して二か月くらいか、お腹の子は今一寸ばかりで人間の形がしてきた頃だろう。その様子を想像しながらきつとちちる虫を子守歌として聴きながら命を成長しているのだろう。子どもはおそらくお孫さんに違いない。人によっては我が子より可愛いと思ってしまうから、嫁のお腹をどうやどうやと撫でたいくらいであろう。

▽秋明菊（シユウメイギク）の句。コスモスと同じくらいに秋を代表する花。「機嫌よく」が何かある。媼がシユウメイギクを機嫌よく持つ原因をあれこれ探る。その探り方は読者自身の経験に照らしているのだ。秋は淋しいけれどこの花は明るく従って媼（年取った女性）の表情にあらわれているにちがいない。媼には何か良いことがあったと思われるが、この手に持ったシユウメイギクにも原因があるようだ。手塩にかけて育てたシユウメイギクが咲いた喜びと秋の爽やかな日和に気持ちいが、ほころんだのであろう。行には大きな未完成の句があるがその方が何時か大化けするに違いないと踏んでいる。

▽をみなへしの句、秋の七草の一つ女郎花。その女郎花が河原や土手に咲いてせせらぎを床しくしたというのが眼目。川のせせらぎは年中変わらず流れているがその汀を彩る草や花によってせせらぎの感じが大きく変化するのである。と詠んだ。これが句眼である。同時句蒲の穂の句も同じで、ほつれかけた様子を「身をやつしたる」と憐れんだ。私はたちまちこの句に小野小町を連想してしまう。夢風撰候補。

▽コスモスよりももの句。私もその人を知っている。コスモスはなよなよとしているように見えるが手に触れると硬くて折れない。行の想う人はそのような人なのであろう。行の思い人は外見よりも芯の綺麗な人なのであろう。六花にもそういう人はいる。

▽奈良坂の句。「色新しき」というが落葉は次に出てくる芽のために席を譲った葉なのである。あとは枯れるばかりだが、自然の営みの美しい姿でもある。月を待つ気配の句もなにやらゆかしい作品ぞろい。夢風撰候補。奈良に行くと滋味深い句ができる。一献も私も。

玉解く芭蕉 ◎ 住田千代子

生臭き風に玉解く芭蕉かな
誰が置きしこの石橋の彼岸花
大股に歩く草むら曼珠沙華
総立ちの子らの目線は秋の虹
曇天に紅をしぼりし酔芙蓉
芙蓉落つこのお手玉の軽きこと
十六夜の月の鏡に泣く子かな
石に飛び草に戻る飛蝗かな
城垣のくつきりしたる秋の風
秋風のみな陸へ向く舳先かな

▽**苗蕉玉解く**の句。初夏芭蕉が葉を広げ始めた様子の季語。芭蕉が葉を広げて世間の生臭い風にさらさせるのだろうかあと千代子が心配している句。「行在所跡に玉解く芭蕉かな 笹村政子」というのがネットに紹介されている。「風に」を「生臭き息に」などとアホナ六甲はついつい考えてしまう。

▽**石橋**の句。能の石橋（しゃつきょう）でなく、明石城公園の宮本武蔵設計の庭園にある池の四国青石を使った一枚岩の橋。そこに曼珠沙華が置いてあり蒼と赤の対比も美しい。誰が置いたの？という疑問で句の広がりを見せた。

▽**大股**の句。何が原因で大股に草むらを歩くのか知らないが、その原因を考えてみる。

▽秋の虹が立って、教え子たちが総立ちになって秋の美しい虹を見上げている。口々に虹だ虹だと声を上げているのかもしれない。子どもたちの出来ごとを詠んでいるのはまるで二十四の瞳の大石先生のようにもある。

▽**酔芙蓉**の句。曇り日の酔芙蓉が紅を絞っているとみた。日中は白く咲く芙蓉も夕方には紅色になってはかなくしぼむ。そのことを紅を絞ると表現。咲いて儂い酔芙蓉という高橋治の小説「風の盆恋歌」を読んで久しぶりに涙しました。という男がいる。その小説と融合してできたのがなかにし礼作詞で石川さゆりの歌。私も以前延川夫妻と風の盆に行ったが、現地に行かなければ分からない雰囲気があった。同時作芙蓉落つもお手玉の軽さになにか想いが籠っているような気がする。

▽**飛蝗**の句。ただ飛蝗はたまたま石に飛んでみたがすぐに草がいいと思っただのか戻ったのは何か意図が含まれてあるような気がする。通常の飛蝗の行動を読んでこのような意味が含まれているのも句の力である。こういう句は何か含んでいると思つて深ぼりしたくなるのである。

▽**秋風**の句。この句は風が陸の方から吹いてくるので、繋がれている船の舳先がおのずと陸地の方へ向くのである。そ

鉄橋を黒く染めたり秋夕焼
出口
誠

てつきょうをくろくそめたりあきゆやけ でぐらちまこと
夕焼の影になって「黒く染められた」という当たり前の発想が却って心地よい。鉄はくろがねとも言
い、その色を改めて認識も。出口誠が家庭のさまざまな苦しみの中に生みだした秀句である。苦しみの
最中にも決して俳句を投げ出さなかった努力がようやく実を結び始めて居る。文芸は時にして火宅の中
に生まれることも。(六甲)